

ある辺境の小さな村に、レティエという名の、美しい村娘がいた。
年頃になった娘に、純朴な幼馴染の農夫や粗野な樵、武骨な狩人など、幾人も
の求婚者があらわれた。

だが、彼女はそれらの申し出をすべて断り続けた。

心に想う相手がいたからだ。

その相手は、こんな辺境の村には似つかわしくないほどに頭脳明晰な才人だと
評判の高い、少し年上の、細面の青年だった。

総じて学のない村の男たちの中で、知的な雰囲気を持っているところに、娘は
惹かれたのだろう。

「気持ちは嬉しいけど、やっぱりあなたとは付き合えないわ」

求婚者たちの中でも最も熱心な幼馴染の農夫からの、三度目になる申し出を素
っ気ない態度で断った後で、レティエは心を決めた。

(あの人に告白しよう)

あの学者肌の青年、アランに、自分の気持ちを伝えよう。

そして、彼の腕の中で一夜を過ごそう。

そう決心して、レティエは青年に告白した。

だが……。

「あなたとはお付き合いできません、残念ですが」

アランは、そう言って首を横に振った。

「ど、どうして？」

村でも評判の美人だった彼女は、自分がこれまで袖にし続けてきた男たちと同
じように、自分もまた求婚を断られようなどとは思ってもいなかったのだ。

「私は、この村を出て、もっと学問を修めたいのです。近々、王都へ留学させて
もらえるという話が来ているのですよ」

優秀な頭脳を持ち、知識も豊富な彼にとっては、所詮は少し顔立ちがいいだけ
の無学な村娘でしかないレティエなどは、端から眼中になかった。

王都に行けば、もっとずっとレベルの高い娘が大勢いることなど、彼にはよく
わかっていたのだ。

もっとも、そこでは彼自身もさして目立つほどの存在ではないのだということ
にまでは、まだ気が付いていなかったが。

「そんな……」

愕然とする彼女に、彼は言った。

「私には夢があるのです。この村にいるだけでは叶わないような、大きなね。だから、あなたの気持ちに伝えて、ここで立ち止まるわけにはいきませんよ」

そう、きっぱりと拒絶された時。

レティエの心の中には、今まで感じたこともなかった激しい感情が湧いてきた。
(彼を、私のものにしてみせる。絶対に！)

それは愛情のゆえか。

あるいは、プライドを傷つけられたことで湧いてきた、単なる執着や独占欲だったかもしれない。

いずれにせよ、レティエにはアランを、このまま諦めるつもりはなかった。

「……そうだわ！」

翌日、彼女は思い立って、密かに村を出ると、近くにある森の奥へと分け入っていった。

そこには魔女が棲んでいるのだと、村の古老たちから聞かされていたからだ。

『決して近づいてはいかんぞ』

そう言われてはいたが、レティエの決意は固かった。

魔法という、一言の元に万軍を粉碎し、千里の距離を飛び越え、寿命の限界をも克服する、万能の力があることは、おとぎ話に聞いて知っていた。

だが、魔法の使い手など、こんな辺境の村では、実際には見たこともない。

その話にある魔女の他に、あてはなかった。

(あの人を私のものにするためには、魔法に頼るしか方法はないんだもの！)

レティエはおそろおそろ進んだが、魔女の森に獣の気配はなかった。

やがて、森の奥深くに、小さな小屋が見えてくる。

それを見て取ったレティエは、大きく深呼吸すると、意を決して扉を叩いた。

「どなたかしら？」

中から返ってきた声は、意外にも、若そうな女性のものだった。

かちやりと、扉が開けられる。

「あ……」

それは、同性のレティエでさえも思わず見惚れてしまうほどに美しい、妙齡の淑女だった。

鴉の濡れ羽色をした艶やかな長い黒髪、白く透き通るような肌、濡れた黒い瞳に、なまめかしく赤い唇。

しっかりとくびれた肉感的な体を、黒衣の下に包んでいる。

黒い魔女帽子の下から覗く整った面立ちには、微かな笑みが浮かんでいた。

「あら。あなたのような若い子が、一体何のご用かしら？」

「えっと、あの……。あたし、お願いがあって……」

レティエはその美貌に気圧されながらも、おずおずとそう切り出した。

「どんなこと？」

妖しい美貌の女は、大事そうに抱きかかえている黒猫をそっと床に下ろしてやりながら、面白そうに目を細めた。

「実は……その……。あなたに、力を貸して欲しいんです」

「ふうん？ 詳しく聞かせてもらえるかしら？」

そう言うと、美女はレティエを招き入れた。

「なるほどねえ……」

レティエの話を聞き終えた魔女は、微笑を浮かべて頷いた。

「それで、私にどうして欲しいというのかしら？」

「あの、あの……。あなたなら、きっとできると思うんです！」

レティエは緊張した様子でそう答える。

「あの人を手に入れるために、どうか、力を貸してくださいませんか？」

「そういうことなら、あなた、一つ忘れていない？」

「え？」

魔女の言葉に、レティエはきょとんとした顔になる。

「私がああなたの望みを叶えたところで、その見返りに何をくれるのか、という話よ」

「あっ……」

レティエははっとして、きまり悪そうに視線をさまよわせた。

「……その。私、あまりお金はもっていないですけど、できる限り……」

「お金なんて、もらっても仕方ないわ。森の奥に、そんな物が使えるお店があるとでも思うの？」

魔女はそう言って手をひらひらさせる。

「じゃ、じゃあ、どうすればいいですか？」

「そうねえ……」

魔女はくすくすと笑いながら、レティエの方にねっとりとした視線を注いだ。

「あなたは、何をしてくれる気があるの？」